

Wissenschaft als Beruf

第5期OB 千葉 貴宏

2009年4月、私千葉貴宏は慶應義塾大学大学院商学研究科前期博士課程（修士課程）に進学しました。大学院に進学してからよく考えるのは、日本の教育に関することです。実際は大学院どころか大学に進学する前からよく考えていたことではありますが、学部生時代の多少の就職活動と現在の学部生への指導（教育と呼ぶには程遠いので...）を通して、少しは以前より現実味を帯びた考察ができるのではないかと思います。こんなところを書いてしまう次第です。なお、ここに書いてあることに共感できなかったり反感を覚えたりした場合には、そこいらの社会不適合者の院生の戯言として流してください。

皆さんが小学生や中学生だったとき、先生という職業の人たちの社会的地位が低いという感覚はあったでしょうか。私には全くありませんでした。そのころずっと考えていたのはむしろ、「先生」というのは偉い人であるはずなのに、どうしてこんなに魅力がないのだろう...ということばかりでした。そして実際に彼らの多くは社会不適合者である場合があるだけでなく、単に不勉強な人である場合すらありました。私は教育に当時強い興味を抱いていたにもかかわらず、いつの間にか教育者になるという夢のための勉強を忘れて、ただ有名大学に入学するという目的のためだけの勉強、というよりもむしろ「勉強」へとシフトしていきました。さらに大学入学後には、多くの大学生は大学入試のときの自分を追い抜くことができず、それを恥じることにすらないという事実が私を驚かせました。注記すべきは、高校までのつめこみ教育と大学教育のギャップがあまりにも大きく、大学における解答のない問題に対応できずに、大学生活の大事な4年間の自己研鑽の時間を捨ててしまうという多数の大学生の様子でした。

連続性のない教育。小中高教育によって自分の力で飛び立てない勉強人間が育成され、大学教育でその状態を抜け出せない人間は、単なる「大きな子ども」として社会に放たれ、目下の日常業務に忙殺されて、真の成長を遂げることなく死を迎える。

しかしながら、小野ゼミという高等教育の場を経て社会へと飛び立っていた方々はそうではないはずです。自分の頭で考え、自分の力で行動し、先人から学び、それを検討したうえで自分の未来へとつなげることでできる人であるはずで。なぜなら、勉強人間であった私自身を真の勉強へと導いてくれたのが小野ゼミだからです。私は構造改革的な人間ではありませんし、小中高の教育を変える意気込みも能力も持ち合わせていません。だからこそ、学生を真の勉強へと導いていける大学教育にこそ、自分の生きる道を見つけられたのです。

表題となっている *Wissenschaft Als Beruf* は、Max Weber の 1919 年の講演のタイトルで、『職業としての学問』と訳されています。そんな表題をつけるとは大きく出やがって、という感じですが、これは、様々な現場で起こる様々な問題（例えば派遣切りとか）を政府による政策に帰そうとする現代の風潮に対する私からの批判です。詳しくは原著を読んでください。というか、詳しいところを忘れてしまっただけです...